

方中履『切字积疑』「真庚能備各母異状」の 条を読む（「切字积疑」第5節訳注）

富平美波

1 はじめに

拙稿「方中履『切字积疑』「等母配位」の条を読む（「切字积疑」訳注1）」（山口大学アジア歴史・文化研究会編『アジアの歴史と文化』第13輯）・「方中履『切字积疑』「切韻当主音和」の条を読む（「切字积疑」訳注2）」（『アジアの歴史と文化』第14輯）・「方中履『切字积疑』「門法之非」の条を読む」（『山口大学文学会志』第61巻）・「方中履『切字积疑』「字母増減」の条を読む（「切字积疑」第4節訳注）」（『アジアの歴史と文化』第15輯）に続き、本稿では、続く第5節「真庚能備各母異状」の部分について、本文の校合と訳注の作成を行い、内容について若干の考察を加える。

2 本文

第1節～第6節に引き続き、校合に使用したテキストは下記の5種類である。

〈底本〉

1988年7月江蘇広陵古籍刻印社が線装本で影印刊行した康熙年間汗青閣刻本『古今积疑』の卷十七（「汗」と略称。）

〈校合に用いたテキスト〉

- ①『四庫全書存目叢書』第99冊（子部）『古今积疑』（中国科学院図書館蔵清康熙汗青閣刻本影印）の卷十七（「存」と略称。）
- ②『続修四庫全書』第1145冊（子部）『古今积疑』（中国科学院図書館蔵清康熙十八年楊霖刻本影印）の卷十七（「続」と略称。）
- ③1990年7月上海古籍出版社が道光世楷堂刊本を底本として影印刊行した『昭代叢書』の「丙集」に収められている「切字积疑」（「昭」と略称。）
- ④1971年5月台湾学生書局が国立中央図書館蔵の旧鈔本を影印刊行した『古今积疑（原題 授書隨筆）』の卷十六（「授」と略称。）

次に、底本に従って本文を掲げ、テキスト間で本文の字句に異同がある箇所には、括弧付きの漢数字を付し、後に異同の内容を注記する。

本文を掲載するにあたって、割注と標点に関しては、下記の方法に従った。

- ・底本で割注であるものは、括弧でくくって記した。
- ・底本には点が施されているので、下記本文もそれによって「。」を表示した。判読

に苦しむ箇所は、適宜判断した。

I 第5節「眞真能備各母異状」本文

眞庚能備各（一）母異状

切韻聲原曰(二)。唇舌腭齒喉之用。有鬪唇。舐舌。口含。舌卷。嘴撮。齒齋。穿牙。引喉。逆鼻。腭上。舌根。縱唇。送氣。口合。唇開。諸法。聲爲韻迕。其状即異。如康董切孔。孔與康皆見母。而初學不解。則何不以坤董。切之。蓋見有公干居。喻有移吳昂。此人之所疑也。以中國之字。呼見母旁響于東韻。則爲(京翁合)而無其字。故成公字。呼見母于寒韻。則爲(堅安合)而無其字。故成干字。呼見母于(三)魚韻。則爲(箕于合)而無其字。故成居字。呼喻母于透韻。則爲(容透合)而無其字。故成移字。呼喻母于(四)韻。則爲(容烏合)而無其字。故成吳字。呼喻母于汪韻。則爲(容叩合)而無其字。故成昂字。(昂五剛切。今法爲恩剛切。俗以此與吳。作忍腭聲。)蓋論親切音和。則前人實近于粗也。今詳韻中聲最多者。惟有眞文恩庚青蒸侵。於翁關嘻縫撮侷忍送之状。字字皆備。其次惟先天之韻。故自孫叔然爲反切。即有經堅丁顛等轉法。玉篇載之。指南以爲浮淺。豈知其理乎。先天本從眞轉。古通一韻。然已不如温亨之盡矣。(何謂眞天通。曰。戰國策陳軫。史記作田軫。陳敬仲世家。作田敬仲。荀子田仲史鱗。即陳仲子。詩應田縣鼓。宋書樂志。引作應棘縣鼓。左傳渾良夫乘衷甸兩牡。陸德明經典釋文音甸。之證反。則唐猶有此聲。說文顛蹟闐。以眞爲聲。煙啞以甄爲聲。馴紉以川爲聲。洗駘以先爲聲。華嚴字母第八列。因字橫行。顛賓津年田頰陳申文斤民勤天。並列。可知西音亦然。又如沈韻。十三元與魂痕爲一。漢地理志同竝縣。竝音伴。按古有讀半爲笨者。益知古人聲口。近世吳元滿音韻。凡諷皆言門。滿音猛。浸音悶。則新安人之鄉語。猶此聲也。)按旋韻圖。庚青(五)正當春秋二分之候。故其聲和平。何謂自然之氣。不相應哉。是以古人于音和之迕韻異状者。以此調唱。其竅自諧。從未有人提出耳。益知切法之專(六)于音和。音和之當專取同類也。

II テキスト間の異同

- (一) (授)はこの「各」字を「名」に作る。
- (二) (授)は「切韻聲原」の「切韻」を欠き、たんに「聲原曰…」とする。
- (三) (昭)はこの「于」字を「干」に作る。底本・他本の「于」の方がふさわしい。
- (四) (授)は「鳴」を「鳴」に作る。底本・他本通り「鳴」が妥当。

(五) (授) は「庚青」を「唐清」に作る。

(六) 底本では「之專」の2字が黒で埋められている。(存)・(統)・(昭)・(授)とも「之專」になっているので、ここではこれらのテキストに従った。

3. 訳注

I 和訳

真と庚は各字母の異なる「状」を完備することができる

「切韻声原」は次のように言っている。「唇・舌・腭・齒・喉」の各音が用いられる際には「鬪唇・舐舌・口含・舌卷・嘴撮・齒齋・穿牙・引喉・逆鼻・腭上・舌根・縦唇・送気・口合・唇開」等の諸法がある(1)。声(母)は韻(母)に制約されて、その「状」が異ってくる。例えば「康董切」は「孔」の音を表しており、「孔」と「康」はどちらも「見母」なのだけれども、初学の人には理解できない。それならなぜ「坤董」切で表さないのか。けだし「見」母には「公」と「干」と「居」があり、「喻」母には「移」と「呉」と「昂」があるのだが、これが人にはなかなか理解できないところである。中国の字を用いて、「見」母を「東」韻の「旁響」で発音すると、「京翁合」となるが、表す文字が存在せず、故に「公」字となる。「見」母を「寒」韻で発音すると、「堅安合」となって字がなく、故に「干」字となる。「見」母を「魚」韻で発音すると「箕于合」となって字がなく、故に「居」字となる。「喻」母を「透」韻で発音すると「容透合」となって字がなく、故に「移」字となる。「喻」母を「鳴」韻で発音すると「容烏合」となって字がなく、故に「呉」字となる。「喻」母を「汪」韻で発音すると「容叩合」となって字がなく、故に「昂」字となる。(「昂」は「五剛切」であるが、今の法では「恩剛切」と表す。俗にこれと「呉」とを「忍腭声」とする。)思うに、ぴったりした音和切という観点から論じるならば、前人の反切は実際のところ粗漏に近い。いま、韻の中で声が最も多いものをつまびらかにするならば、ただ「真・文・恩・庚・青・蒸・侵」だけが「翁鬪嚙縫撮偏忍送」の「状」について文字が逐一完備しており、それに次ぐのが「先・天」の韻である。故に孫叔然が反切を作って以来、「経堅」・「丁顛」で反切の助けとする「転法」が用いられてきたのである。『玉篇』がこれを載せている(2)。『切韻指南』はこれを浅薄だと見なしている(3)が、道理がわかっていないというべきだ。「先天」韻はもともと「真」韻から転じたもので、古韻では通じて一つの韻となっていた。しかしすでに、「温亨」韻の完璧さには及ばなくなってい

る(4)。「真」・「天」が通じるとはどうか。曰く。『戦国策』の「陳軫」を『史記』は「田軫」と書いている(5)。「陳敬仲」を「世家」は「田敬仲」と書いている(6)。『荀子』の「田仲史鱗」(7)とは「陳仲子」のことである。『詩経』の「應田縣鼓」(8)を『宋書』「樂志」は「應棘縣鼓」と引用している(9)。『左伝』の「渾良夫乘衷甸兩牡」について、陸徳明の『經典釈文』は「甸」の読音を「之證反」としている(10)。とすると、唐代にもなおこの音があったことがわかる。『説文解字』では「顛・躡・闕」が「真」を声符としており、「煙・嚶」が「甄」を声符とし、「馴・紉」は「川」を声符とし、「誦・駟」が「先」を声符としている(11)。『華嚴字母』の第八列は、「因」字から横に、「顛賓津年田頻陳申文斤民勤天」と並列しているから、西方の音もこれと同じような状況であることがわかる(12)。また、沈約の韻書も「十三元」韻が「魂・痕」韻と一緒にされている(13)。『漢書』「地理志」の「同竝縣」は、「竝」の音が「伴」である(14)。恐らく古には「半」を「笨」と発音したことがあったと見え(15)、ますます古人の発音の習慣が知られるのである。近世の呉元満の音韻では、「凡・満」をみな「門」と言い、「満」の音を「猛」、「浸」の音を「悶」としている(16)。すなわち、新安人の方言ではいまなおこの音なのである(17)。(18)「切韻声原」の「旋韻図」の言うところによると、「庚青」は正に「春秋二分之候」にあたるので、音が穏やかなのである。自然の気が互いに応じ合うのは当然の現象である(19)。したがって、古人は音和であるが韻の制約を受けて「状」が異なるものについては、この韻を用いて音を整えたのである。そうすれば音が自ずから整うのだが、まだこの考えを明言した人がいなかったのだ。ますます反切が音和を専らとすること、音和は専ら同類の用字を採用することが知られるのである。

II 注

(1)「切韻声原」には「十二開合説」の条にこれと類似の用語が列挙されているけれども、名称も数も、ここで挙げられているものと完全には一致していないようである。
(2)反切を用いる際の助けとして、真青韻系の字音を持つ字と先天韻系の字音を持つ字をそれぞれ1字ずつ選んだ「助紐字」を用いる習慣は、『韻鏡』巻首の「三十六字母・帰納助紐字」の図にも掲載されており、「舌」音「清」「端」母のそれは「丁顛」、「牙」音「清」「見」母のそれは「經堅」である。ここに引かれている『玉篇』では、元刊本の『大広益会玉篇』巻首の「新編正誤足註玉篇広韻指南」所載の「切字要法」がこれに当たるが、見母と端母の助紐字はそれぞれ「經堅」・「丁顛」であってここに引かれている用字と一致する。

(3) 下記の注 (4) に見るように「切韻声原」の表現は「指南鄙之」、「釈疑」では「指南以爲浮淺」であるが、『經史正音切韻指南』「序」に見える「聲音妙用本乎自然、若以浮淺小法一槩求切而不究其源者、予亦未敢輕議其非、但恐施於誦讀之間、則習爲蔑裂矣。」等の叙述を指すものだろうか。

(4) この部分の内容は、「切韻声原」の「論古皆音和説」の以下の叙述を踏まえていると考えられる。

「孫叔然以來、即有經堅、丁顛等轉法、指南鄙之、豈知其理乎？ 聲爲韻迕、其狀即異。惟眞温庚青一韻、聲多、于翕闕嚙縫撮侷忍送之狀、字字皆備；其次惟先天之韻、然已不如温亨之盡矣。」

「何謂迕狀？ 曰：呼見母于東韻、則爲京翁合、而無其字、故成公。呼見於寒韻爲干、呼見于魚韻爲居、呼喻于透韻爲伊、呼喻于汪韻爲昂、呼風于侵韻則無聲矣。惟唱眞青、諸狀不迕。」

但し、「先天本從眞轉。古通一韻。」の2句については、下記の注 (3) を参照。

(5) 陳軫については『史記』の「張儀列伝」に附された「陳軫伝」に伝が見え、張儀と同じく遊説の士で、始め秦の恵王に、後に楚王に仕えた人であるが、『戦国策』の秦策一・二、齊策一・二、楚策一・三、魏策一、韓策一・三等に名前が登場する。しかし、『史記』においても、上記の卷七十「張儀列伝」のほか、卷四十「楚世家」・卷四十五「韓世家」などいずれも表記は「陳軫」であって「田軫」ではない。

(6) 『史記』卷四十六「田敬仲世家」では、陳の厲公の子陳完が齊国に奔った後、陳を改めて田氏と名乗ったことを載せている。唐・司馬貞の「史記索隱」では「據如此云、敬仲奔齊、以陳田二字聲相近、遂以爲田氏。應劭云、始食采於田、則田是地名、未詳其處。」としている。

(7) 『荀子』卷二「不苟」篇の末尾「人之所惡者、吾亦惡之。夫富貴者、則類傲之。夫貧賤者、則求柔之。是非仁人之情也。是姦人將以盜名於晦世者也、險莫大焉。故曰盜名不如盜貨。田仲史鱸不如盜也。」を指すと思われる。清・王先謙の『荀子集解』はこれについて盧文弨の説を引用し「盧文弨曰、田與陳古多通用。」と述べている。

(8) 『詩経』「周頌」「臣工之什」「有瞽」第5句の「應田縣鼓」を指すと思われる。鄭玄の箋は「田、當作鞞、鞞小鼓、在大鼓旁、應鞞之屬也。聲轉字誤變而作田。」と述べている。また『經典釈文』には「田、毛如字、大鼓也。鄭作鞞、音胤、小鼓也。」とある。

(9) 梁・沈約撰『宋書』卷十九志第九「樂」一の「八音」について述べている節に「八音四曰革。革、鼓也、鞞也、節也。大曰鼓、小曰鞞、又曰應。……應鼓在大鼓側、詩云應鞞懸鼓是也。」とあるのを指すと思われる。

(10) 『春秋左氏伝』哀公十七年の伝に見える「良夫乘衷甸兩牡」に対し、通志堂本『經典釈文』「春秋左氏音義之六」では次のような注釈を附けている。「乘衷甸 時證反、説文作佃、云中也、春秋乘中佃、一轅車也」。従って、通志堂本では、「之證反」ではなく「時證反」である。そもそも「之證反」では音が反切下字の「証」と同音に戻ってしまうので、中古音時期の反切としては不適當である。「春秋左氏音義」ではこれ以外の所では「甸」の音注はおおむね「徒遍反」や「徒練反」である。この「時證反」は前の「乘」字の音注ではないかという疑いが残る。例えば、これに先立つ部分に「而乘 繩證反」という音注が見える。なお、『經典釈文』が引いている『説文解字』は八篇上「人」部の「佃」字の説解で、大徐本では「佃、中也。从人田聲、春秋傳曰、乘中佃、一轅車。堂練切」である。

(11) 大徐本『説文解字』では、ここに挙げられている例字のうち、「真」・「川」・「先」の諧声系列に属する諸字は、次の通りであって、「釈疑」の声符の指定と一致する。

「顛」：「从頁眞聲」（「都年切」）平声先韻開口端母

「蹠」：「从足眞聲」（「都年切」）同上

「闕」：「从門眞聲」（「待年切」）平声先韻開口定母

「馴」：「从馬川聲」（「詳遵切」）平声諄韻合口邪母

「紉」：「从糸川聲」（「詳遵切」）同上

「詵」：「从言从先 先亦聲」（「所臻切」）平声臻韻生母

「駢」：「从馬先聲」（「所臻切」）同上

「顛」と「蹠」の2字は、諧声によって臻撰真韻の声符と山撰先韻の文字が関連する例である。「馴」と「紉」の2字は逆に山撰仙韻（「川」は『広韻』で仙韻合口昌母「昌縁切」）の声母と臻撰諄韻の文字が関連する例であるが、こちらは合口音同士である。「詵」と「駢」の2字もまた、山撰先韻の声符と臻撰臻韻の文字が関連する例で、こちらは開口の音である。

しかし、「甄」を声符とすると述べられている2字については、大徐本の声符の指定と本節の記述が一致しない。大徐本においては「煙」字の声母は「甄」の省声ではなくて「堊」そのものである。

「煙」：「从火堊聲」（烏前切）

「咽」は『説文』には見えないが、『集韻』によると「咽」（平声先韻開口影母「因蓮切」）の異体字であり、また、「誣」（平声諄韻開口影母四等「伊眞切」）の異体字でもあるが、字音がこの文脈に合うのは「咽」の方であろう。「咽」は『説文』によれば「从口因聲」（烏前切）（二篇上「口」部）である。「堊」と「因」は『広韻』では同じく、平声真韻開口影母四等「於眞切」の音を持っている。「甄」（「从瓦堊聲」）の大徐本の反切は

「居延切」であって他の2字と韻母が大きくかけはなれているわけではないが、『広韻』では真韻（開口章母「側〔職〕鄰切」）と仙韻（開口見母四等「居延切」）の2音があり、真韻の音における字義は姓の「甄」である。真・先の通用を挙証する諧声系列としては、大徐本のように「聖」（大徐本「於眞切」）を声符とみなしたほうがより説得的だと考えられる。

(12) ここで引用されている『華嚴字母』という文献について、譚世宝氏の『悉曇學與漢字音學新論』には次のような解説が見えている。

“趙蔭棠（1893—1970）證明：“《大藏字母切韻要法》的形式，是做照《華嚴字母韻圖》的；而《字母切韻要法》，乃由《大藏字母切韻要法》而來。”這是十分正確的。《大藏字母切韻要法》為阿摩利諦撰於康熙三十八年至四十一年間，而《康熙字典切韻要法》則撰於康熙五十五年。至於《華嚴字母韻圖》的年代，趙氏認為可能是元明間人創作或刪定的東西，其實，《華嚴字母韻圖》之類的東西，是在中國寺院實際流傳的日常習誦功課本，是專門為了使華僧掌握佛家悉曇字母切韻之學而編的基本教材。因此應當是與最早期的華僧習誦佛經的字母經生並行的。…（中略）…。祇是由於“非經本文”，更兼是“實為秘密要用”，所以是在寺廟中秘密流傳習誦而不收入《大藏經》之內，情況與唐以前流行於寺門的悉曇章相同。因此教外之人一直鮮知其詳。”（pp.56～57）

“後來在佛寺中廣為流傳的《華嚴字母》之類的唱誦韻圖字表，實際就是一種漢語化的悉曇字母習誦表，而《四聲等字》之類的純漢語的字母與兩個助紐字並列的形式，可以視為《華嚴字母》唱誦表的一種縮略。”（p.169）

この『華嚴字母』（『華嚴字母韻図』）は、譚世宝氏も参照している趙蔭棠の「康熙字典字母切韻要法考證」が後半部分の書影を掲載しているが、趙蔭棠氏が指摘するように、清・熊士伯著『等切元声』卷之八「闡釋氏字母」の条にも「華嚴經四十二字母原本」と題して採録されており、また、譚氏上掲書が指摘しているように、台湾の新文豊出版社刊行の『同文韻統』（1978）の第5巻と第6巻の間に収載されている「華嚴法会起止儀」の中にも収められていて、譚氏が言うように“唱誦“華嚴字母”韻圖の内容”（p.57）と認められる内容を備えており、「釈疑」が引用する内容とも符合している。

この「華嚴字母」の内容について『等切元声』所収のテキストと新文豊版『同文韻統』収録のテキストを比較すると、二合音の表示方法の相違や異体字の使用などの形式的な異同のほか、文字の順序が顛倒していたり——この点では『同文韻統』所収のものの方が道理に合っている——『等切元声』では単に「○」が表示されている位置に『同文韻統』所収のものでは「○」中に文字が補われているなどの違いがあり、また、明らかな文字の異同など見過ごしがたい違いも若干見られるが、以下の論旨を大きく左右するような相違は特にないと思われるので、ここでは、判読しやすい『同

文韻統』所収のものによって述べることにしたい。

この「華嚴字母」と呼ばれている文字表（韻図）は、横の最上段に配列された42種の梵語字母の音訳漢字が声母を代表し、それを、縦の最初の行に配列された零声母字の表す韻母と、おのおの結合させることによって展開されてゆく音節表形式のものである。最初の縦行に配列されている文字は、

「阿○俠鞞翁烏爇哀醫因安音諳謳阿」

である。方以智の「切韻声原」には、この第1行目だけが採録されている。「韻攷」の中に次のような内容で見えるのがそれである。

「華嚴字母 即隋志所載，以十四字貫一切音。

阿、俠、鞞、翁、烏、爇、哀、醫、因、安、音、諳、謳、阿。十三表閨，兩阿藏因，天在因中，山在安中，四閉爲二。」

この方以智の解釈は、譚氏が参照している趙蔭棠「康熙字典字母切韻要法考證」でも論及され、次のような考察が加えられている。

“華嚴字母韻圖不知成於何時，現今所得見者爲大方廣佛華嚴經中之所載。此書雖是唐時于闐國三藏沙門實叉難陀譯的，而華嚴字母未必不是後來附入的。圖上列四十二母每母下豎寫十二字，成爲一豎行；每行之下又贅以與母相同之字。對於這豎行的解釋有三種說法：一說謂每豎行含十四字，即隋書謂以十四字貫一切音者，方以智主持之，我覺得此說未必靠得住；一說謂每豎行含十二韻，袁子讓主持之；一說謂十二字之下尚有與其母相同之字共爲十三韻，馬自援主持之。此三說之中，若從袁說，就是十二攝。這個十二攝雖然在外貨的華嚴字母統御之下，其實已雜入中國語言的勢力。牠在明末清初的音韻史上發生好多的影響。”（p.95）

確かに、上記の第1行目を文字の数から見ると、2つめに置かれている円形の記号を削って字だけを数えれば「声原」の言うように14字となるし、記号と2個の「阿」字を全て削れば12字（梵語字母の「声勢」12字と同じ数）となって、悉曇学と関連のある数が出現する。しかしその内容を見てみると、鼻音韻尾を持つ漢字が多数含まれていて、譚氏が“實際就是一種漢語化的悉曇字母習誦表”と言い、趙氏が“其實已雜入中國語言的勢力”と表現する状況が見て取れるように思われる。趙氏論文は、字母「迦」（ka）の行を例に引きつつ、『華嚴字母』の韻母を次のように推定している。

“華嚴字母之十二韻則爲：

岡（ang）拑（eng）公（ong）孤（u）高（au）該（ai）鷄（i）斤（in）干（an）金（im）甘（am）鈎（ou）”

「切韻声原」は、これらの韻母がさまざまな声母と結合して音節を展開してゆく第2行以下の部分は収録していないが、『同文韻統』所載のそれで全体を見てゆくと、第

1行の「阿」に隣り合って同じ段に配列されている各行の第1字は次のようになって、明らかに、『華嚴経』「入法界品」等に見える四十二字門の字母の音訳であることがわかる。

「阿 多 波 左 那 邏 施 婆 茶 沙 嚩 哆 也 瑟吒二合 迦 娑 麼
伽 他 社 鑠 施 奢 佉 叉 娑多二合 壤 曷羅多（或いは曷羅多）三合 娑
車 娑麼二合 訶婆二合 綎 伽 吒 拏 娑頗二合 娑迦二合 也娑二合 室左
二合 佉 陀」

田久保周誉氏の『批判悉曇学』等によると、四十二字門の字母説は文献によって順序の不一致が数々見られるとのことであるが、唐の実叉難陀訳『大方広佛華嚴経八十卷』（大正蔵 No.279）卷七十六「入法界品」では、2番目の字母（“a ra pa ca na ……”の“ra”の位置）に音写字「多」が来ており、この「華嚴字母」でも同様に2番目は「多」である。ただし、大正蔵 No.279の文言と照合すると、若干の字母の音写漢字が一致していない（大正蔵の「者」が「左」、大正蔵の「縛」が「嚩」になっている等）。だが、譚世宝氏も上掲書で触れている文献に、清・乾隆帝勅撰の『続通志』があり、その卷九十六「七音略四」の「大蔵経字母同異譜」では

「惟實叉難陀所譯華嚴経字母四十二、後世沙門每字各唱演十二字、仍歸本字収聲、共十三字成句、每誦經一段、畢唱縁三四句。」

と述べられていて、上記の「華嚴字母」（「華嚴字母韻図」）の体裁と符合しており、もと実叉難陀訳の「華嚴経」に基づいた作であることがわかる。

そして、「釈疑」のいう「第八列」とは、先に掲げた「阿○佚鞞翁烏燠 哀醫因安音諳謳阿」のうち、「阿○」を除く3番目の欄から数えて第八列目、「因」の段を横に見て言ったものである。つまり「因」の韻母が上記の42種の声母と交わって作る音節の一覧である。上記の新文豊版『同文韻統』所載の文献ではこの第8段は次のような文字が並んでいる。

「因 顛 賓 津 年 隣 田 頻 陳 申 文 顛 寅 尸 珍 斤 新 民 勤
天 辰 凶 田 伸 鑿 噴 西 顛 仁 賢 隣 顛 貧 瞋 西 民 ○ 貧 辛 芹 珍
紉 西 砵 西 片 亦 辛 室 津 獮 田」

そして、「釈疑」が引用している文字列は、上の下線を引いた部分を取り出したものに等しいことがわかる。

これら「釈疑」の引く14字は、それぞれ『広韻』では次のような字音を持っている。

「因」平声真韻開口影母四等「於真切」

「顛」平声先韻開口端母「都年切」

「賓」平声真韻幫母四等「必鄰切」

「津」平声真韻開口精母「將鄰切」
「年」平声先韻開口泥母「奴顛切」
「田」平声先韻開口定母「徒年切」
「頻」平声真韻並母四等「符真切」
「陳」平声真韻開口澄母「直珍切」（又去声）
「申」平声真韻開口書母「失人切」
「文」平声文韻微母「無分切」
「斤」平声欣韻見母「舉愀切」（又去声）
「民」平声真韻明母四等「彌鄰切」
「勤」平声欣韻群母「巨斤切」
「天」平声先韻開口透母「他前切」

即ち、韻母はいずれも平声真韻開口か平声先韻開口であって、これらが同韻母であると見なすなら、まさに真文系の韻と先天系の韻とが通用しているということになるわけである。先に引いた趙蔭棠の論文が引用するところによれば、明・万暦の学者袁子讓の『字学元元』はこの点について次のような説明をしているという。

「華嚴字母押韻六百二十四字，皆用開攝，故臻攝「多」下不用「敦」而用「顛」，讀如「丁」；「他」下不用「吞」而用「天」，讀如「汀」；「拖」下不用「屯」而用「田」，讀如「亭」；皆取開不取合，此可以意通者也。」

「釈疑」のそれとは、また異なる考え方である。

(13) 言うまでもなく、『広韻』等において韻の配列順が「上平声 … 真第十七、諄第十八、臻第十九、文第二十、欣第二十一、元第二十二、魂第二十三、痕第二十四、寒第二十五、桓第二十六、刪第二十七、山第二十八、下平声 先第一、仙第二 …」となっていることに基づくが、「十三元」という表現から明かなようにここでは平水韻が用いられていると思われる。「平水韻」では「上平声 … 十一真、十二文、十三元、十四寒、十五山、下平声 一先 …」である。いずれにせよ、等韻の十六撰で「山」撰に属する韻のうち、「元」韻だけは「臻」撰に属する諸韻の中間に配列されている。

(14) 『漢書』卷二十八「志」「地理上」の「牂柯郡」の属県に「同竝」県があり、顔師古の注に「應劭曰、故同竝侯邑、竝音伴」とある。『広韻』の音はそれぞれ次の通り。

「竝」上声迥韻並母「蒲迥切」
「伴」上声緩韻並母「蒲旱切」
去声換韻並母「薄半切」

(15) 「半」と「笨」の『広韻』における音は次の通り。

「半」去声換韻幫母「博慢〔漫〕切」

「笨」上声混韻幫母「布付切」・同並母「蒲本切」

(16)「浸」はいずれのテキストでもこの字形であるが、文脈から判断して「漫」とあるべきところだろうと思われる。例字と音注の『広韻』における読音は次の通り。但し、「満」は『漢語大字典』では『正字通』の記述に基づいて「謾」の異体字とされている。

「謾」平声桓韻明母「母官切」

「門」平声魂韻明母「莫奔切」

「滿」上声緩韻明母「莫旱切」

「猛」上声梗韻明母二等「莫幸〔杏〕切」

「漫」去声換韻明母「莫半切」

「悶」去声愿韻明母「莫困切」

すなわち、「釈疑」の記述によると、呉元満の音では、山撰の重唇音の音節が、他の音節と分かれて狭い主母音を持つようになっているわけで、その際、-n韻尾と-ng韻尾の区別がなくなっていることが見て取れる。

呉元満の著した字書のうちで見ることのできるものに『六書總要』（東京大学東洋文化研究所蔵）や『六書正義』（前田育徳会尊経閣文庫蔵）があるが、そのうち『六書總要』は代表的な文字のみを収録し多くの諧声文字を省いた簡略な字書であるため、これら3文字は見出し字として収録されていなかった。また『六書正義』はそのような簡略版ではないが、「謾」・「満」・「漫」の3字に附された音注は次の通りで、「釈疑」の紹介するような特殊な音韻特徴を示してはいない。これは、著者が、自身の方言音に干渉された読音を反省してより中古音に近づいた音注に改めるようになってからの状況を反映するものではないかと思われる。

『六書正義』

二卷「地理」上 水部「諧本聲 去」「漫 音慢」

二卷「地理」上 水部「諧轉聲 上」「満 音瞞」

六卷「身体」中 言部「諧轉聲 平」「謾 音蠻」

しかし、『六書總要』にはこれらの見出し字は見えないものの、各見出し字に附された音注を反切系聯法によって整理し、かつ、巻末に収録された「諧聲指南」の分韻と照らし合わせて観察することによって、その音韻的特徴をうかがい知ることができ、筆者はその調査結果を「『六書總要』（明・呉元満著）の音注について」で報告したことがある。この結果に従って「謾 音門」・「満 音猛」・「漫 音悶」という3つの音注がそれぞれどの韻に属するかを推定してみると、桓韻の幫組（「謾」・「満」・「漫」）は「十二文韻」に、魂韻の幫組（「門」・「悶」）は「十庚韻」に、庚韻二等の幫組は「十一萌韻」及び一部が「十庚韻」に入っていて、上記3韻に属する文字は中古音の粹組

みで表示するとはほ次のようになっている。

十庚	庚二等・耕（開）	知・莊組 見・曉組 明母（「黽」）
	登（開）	端組 泥母 精組 見組
	痕	端組 見系
	魂	幫組 端組 精組
十一萌	庚二等・耕・登	幫組
	庚二等・耕・登（合）	見・曉組
十二文	文	非組
	桓	幫組 端組 來母 精組
	魂	見・曉組 影母 泥母（「媿」）
	庚二等・耕（開）	娘母（「期」）

なお、桓韻の見・曉組の字は、十三の「桓」韻に入っている。このように、『六書總要』では「庚」韻や「文」韻で -ng 韻尾と -n 韻尾の合流は認められるものの、「釈疑」が紹介する3つの音注例は、被注字と音注字が完全に同音ではない。筆者は上記の拙稿の中でこの「釈疑」の記述との不一致について次のような叙述をしたことがある。

「中古臻・曾・梗撰一二等合口系の韻は、開口系が一韻（庚韻）であるのに対して、-ng 系の萌・-n系の文の二韻がある（入声、末・勿韻）。中古山撰の桓韻の唇音・舌尖音声母を持つ字は文韻に合流しているが、このことについて、桐城人方以智の子方中履が著した『古今釋疑』は、呉元満の音韻において、

講の音は門

満の音は猛

浸[×]〔漫〕の音は悶

であって、新安人の郷語がこのようであると述べているが、講（謾）・満・漫は中古桓韻明母の字であって、呉の文韻所属と考えられるのに対し、門・悶は魂韻明母、猛は庚韻明母だから、呉の庚ないし萌韻の所属と推測できるものである。したがって、方中履は、すくなくとも唇音について、呉の二韻の区別をないものとしているに等しい。この二つの合口については、さらに検討が必要である。」（pp.81～82）

また、呉元満の手になる韻書『萬籟中聲』については、永島榮一郎「近世支那語特に北方語系統に於ける音韻史研究資料について（続）」にその音韻体系の概略が述べられているが、それによると『萬籟中聲』の平声の韻目は「諧聲指南」のそれと同じであり、上記の3つの韻について永島氏が与えている推定音価はそれぞれ次のようである。

『萬籟中聲』

第十庚 əŋ

十一萌 uəŋ

十二文 uən

永島氏は同論文の中で、次のように述べている。

「更にその内容から見た特色を云ふと [-n] と [-ŋ] との混合があり、それは真韻淳韻庚韻に於ては全く混乱して居り、これは彼の「六書總要」中にも窺はれる事であつて、彼の據った方言に起因してゐる。」(p.21)

(17) 上記注(16)で引用した永島論文も『萬籟中聲』の真韻・庚韻などの内容が、編者呉元満の方言を反映したものだと言及しているが、方中履もまた呉元満の著作に現れるこのような音韻特徴を、明末清初当時の方言音を反映するものと考えている。方中履が言う通り、呉元満は安徽省歙県の人である。但し『安徽省志 方言志』(1997 方志出版社)や『徽州方言研究』を参照して見ても、歙県を含む徽州方言の現在の状況では「満」と「門」と「猛」の韻母が完全に一致する状況は見られない。例えば『徽州方言研究』が報告する歙県の方言音では、「満」は [mo]、「門」や「猛」は [mɛ] である。また『安徽省志 方言志』の記述によれば、方以智の本籍地である安徽省桐城の方言は、「皖中江淮官話」に属する方言だが、ここでは「慢」は [man] だが「満」は [mon] であり、「門」と「猛」はともに [mən] となっている。

(18) 「切韻声原」には、注(4)で掲げた第一の引用に続き、次のような叙述がなされており、「切韻声原」の注で列挙されている例証もまた、「切字釈疑」のそれとほぼ一致していることが見て取れる。なお、引用文の冒頭に述べられている「切韻声原」「旋韻図」での「真文」・「庚青」・「先天」等の配置については、下の注(19)を参照。

「旋韻眞青，正當春秋二分之候，故其聲和平，自然相應，以此調唱，其竅自諧。春秋之用，豈人力可思議者哉！先天本從眞轉，古通一韻，今中和立南北之極，而旋元適以先天和合，亦用三餘一之符乎？（何謂眞天通？ 曰：國策陳軫，史作田軫，陳敬仲世家作田敬仲，荀子田仲，史輜即陳仲子，詩：「應田縣鼓」，宋書引作「應輜縣鼓」，左傳「渾良夫乘衷甸兩牡」，陸德明音甸之證反，說文顛蹝闐以眞爲聲，煙啞以輜爲聲，馴紉以川爲聲，誦駢以先爲聲，孫堅謂甄井同名，後乃呼甄，華嚴字母第八列，因年天田並列，可知西音亦然。又如沈韻元與魂痕爲一，漢志同並縣，並音伴。智按古有讀半爲笨者，呉元満満音猛，満言門，亦足證矣。」(途中、「宋書引作『應輜縣鼓』」とする部分について、底本とした『方以智全書』本「通雅」は「輜」を車偏に作っているが、ここでは『和刻本辭書字典集成』本「通雅」の表記に従った。

(19) 「切韻声原」の「旋韻図」はいくつかの同心円に八卦と韻を配した図であるが、その最も中心に近い円に配列されている八卦は、最上部から時計回りを見ると「離・坤・

兌・乾・坎・艮・震・巽」の順に並んでいる。八卦と方位の対応関係では、「離」が南、「兌」が西、「坎」が北、「震」が東であるが、「切韻声原」の十六撰が配列されている円と、上記の八卦の位置関係を見ると、「坤」と真西にあたる「兌」との間には「央汪」・「亨青」の2撰が並び、真東にあたる「震」と次の「巽」との間には「晷恩」・「歛安」の2撰が並んでいる。「亨青」撰は即ち「庚青」韻にあたり、「晷恩」撰が「真文」韻にあたるので、「庚青」と「真文」の2つの韻は、「旋韻図」では、西・東端の1つ南寄りの側に位置している訳である。東は季節で言えば春、西は秋にあたるので、ここで「声原」やそれを受けた「釈疑」が言うところの「春秋二分之候」とはこのような方位と韻の対応関係を指して言ったものかと思われる。「釈疑」が取り上げる「庚青」韻はその春秋を結ぶ線の、秋に至る直前に置かれている韻である。

4. おわりに — 「見有公干居。喻有移吳昂。」について

この節は、「釈疑」が「切韻声原」から受け継いだ、音節の「状」について説いている。作者は、全ての「状」の音節を完備しているのは真韻と庚韻であるから、それについて学ぶべきであると提唱しているのであるが、それらの韻の所属字の字音を考察していると、古韻と今韻とで所属を異にする韻を媒介として、別韻と関連するものが出てくる。例えば、「釈疑」の言う「真」韻の所属字は、先韻を媒介として山撰の字音と関連を持ってしまう。そのように歴史的に観ると難解な問題が立ち現れてくるこれらの韻について、若干の考察を試みているところが、本節の興味深い特徴であろう。

それはともかく、この「声」の「状」という考え方は、「切韻声原」の音韻学上の知見の重要な一つであり、「切韻声原」所載の韻図において、その構成の基準となっているものでもある。「切韻声原」においては、例えば次のような叙述によって、その説明が試みられている。反切の原理に関連しては、

「切響期同母（切上一字），行韻期叶而已（切下一字）。今母必羸細審其狀焉（粗奔細兵，粗登細丁，狀則公干于見，烏思〔筆者注「恩」か〕于影也。）」

また、「状」そのものを説明して、

「何爲迨狀？ 曰：呼見母于東韻，則爲京翁合，而無其字，故成公。呼見於寒韻爲干，呼見于魚韻爲居，呼喻于透韻爲伊，呼喻于汪韻爲昂，呼風于侵韻則無聲矣。惟唱眞青，諸狀不迨。」

ここで導入される「状」の類別とは、後に「四呼」と呼ばれるものと同様の音節分類法であり、それが、字母の区別には用いられないながら、声母と関連づけて説明されているところに特徴があると言えよう。

「切韻声原」における「状」の概念については、時建国氏「《切韻声源》术语通释」が「二、声类方面的术语」の「3.粗声、细声和声状附轻重。」の条で解釈しているところが妥当であると思われる。この一節は時建国氏の後の論考「《切韻聲源》研究」の「一、術語通釋」の該当する内容の段落とほぼ同じ文言であるが、これらの時氏の解説によると、「切韻声原」の「粗・細」や「声状」の術語の指すところは次のようであり、

“方氏说：“其轻、重曰粗声、细声。”从他在“切母各状”中把“奔”定为帮粗，“兵”定为帮细。“肱”定为见粗，“君”定为见细等等看来，所谓粗声，实际指与开口呼、合口呼相拼的声母，细声指与齐齿呼、撮口呼相拼的声母。这是沿用吕坤《交泰韵》声介合母的方法，把声母分成了粗、细两类，又别出心裁地把两类声母同翕辟结合起来，从而也构成四呼的局面。

方氏既然把粗、细看成是轻、重的等量词，那么这个轻、重跟《涅槃文字》中表示送气与否的轻、重自然不同，而且跟《七音略》表示开、合，《青郊杂著》表示呼的轻、重也不相同。他的轻、重，与听辨声介合母的音色有关。具体说来，由于粗声母只出现于开、合二呼韵，而开、合二呼韵没有[i][y]介音，发音时口腔共鸣空隙大，此类声母方氏听起来低而沉，故曰重，反之，齐、撮二呼韵有[i][y]介音，发音时口腔共鸣空隙小，声母听起来高而扬，故曰轻。

这样看来，声母的粗细或轻重，是声韵结合时声母受不同介音的影响而表现出来的不同音品，即方氏所说的声状，他说：“声为韵连，其状则异。”说的正是这层意思。声状有四，拿见母为例，其四状叫做庚见粗京见细肱见粗君见细，可知他的四状，实际指与开、齐、合、撮四呼韵拼合的声母。

不过，方氏的声分粗细，与纯粹声介合母的做法还有区别，因为声介合母的结果，执必（势必？）要增声减韵，而方氏不过用声介合母的方法描写声母在不同呼第中的不同状况，这个介母，在分析韵母时又被用来显示四呼，他的这种方法，在建立音韵系统、方便审辨字音方面有一定的积极作用。”（p.10）

すなわち、「切韻声原」においてはすでに四呼の区別が認められており、「声状」は、声母と介音が合体した形式の字母法を採用したものではないが、声母が、異なった介音の影響を受けた結果生じる音色の差異に基づいた類別とみなされており、それが韻母の類別としての四呼と互いに呼応する形になっているのだという。

なお、この「四状」を説明する「釈疑」の叙述の中で気になる言葉使いは、次の「無字」という表現の頻出である。本稿の冒頭に示した「釈疑」の本文を再び引用してみよう。「以中國之字。呼見母旁響于東韻。則爲（京翁合）而無其字。故成公字。呼見母于寒韻。則爲（堅安合）而無其字。故成干字。呼見母于魚韻。則爲（箕于合）而無其字。故成居字。呼喻母于透韻。則爲（容透合）而無其字。故成移字。呼喻母于鳴韻。則爲（容

烏合) 而無其字。故成吳字。呼喻母于汪韻。則爲(容叩合) 而無其字。故成昂字。(昂五剛切。今法爲恩剛切。俗以此與吳。作忍腭聲。)

ここでは、「京」・「堅」・「箕」等の「見」母の反切上字が「翁」(合口)・「安」(開口)・「于」(撮口)等の反切下字と合体したところには「其字」が「無」い(ので、「公」等の音節に成る)のだと言われている。「喻」母の例(むしろ影・喻・疑母等が合流した零声母系の音節と表現したほうがふさわしうであるが)についても同じで、「喻」と同じ「状」すなわち撮口呼の反切上字が、それとは別の開口・合口・齊齒呼の韻母と合体したところには直接には「無其字」だということだ。それらがすんなりと他の呼の見母なり喻母なりの音節になるためにはもう一つ曲折が必要だといわんばかりの表現であるが、これはどうした原因で導かれたものなのであろう。

もちろん、それらの婦字の音は、反切上字と「状」が異なるのであるから、韻図で反切上字の位置する段(「等」と言い換えてもよいが)と同じ段をそのままたどっていても、当該婦字は出てこない道理である。たんにそれだけのことを述べたものなのかもしれない。しかし、やや大胆な想定ではあるが、「釈疑」の言う見母なり喻母なりが、後続の韻母の如何によって発音が甚だしく異なる現象が既に出現していて、それがこのような形で「釈疑」の表現に影響を及ぼしたということが考えられるであろうか。方中履の父で「切韻声原」の作者方以智が安徽の桐城の人であることはよく知られているが、この事実に基づいて、「切韻声原」の音系と現代の桐城方言の音系とを比較した論考に、孫宜志氏の「方以智《切韻声原》与桐城方音」がある。孫氏論文によると、現代の桐城県の方言では、見系の声母について見ると、「経」と「精」が [tɕ] となって「蓋・光」の [k] と離れ、「尖団」の区別が失われているほか、さらに、見組の撮口呼は知章組と合流し、例えば見母の「拳」等の字の声母は [tɕ] となっている。また、影・喻・疑等の字について見ると、影母・疑母の開口呼では音節頭に [ŋ] が現れて、他の呼とは区別ができてきているという。そして、孫氏が「切韻声原」の音系をこれと比較した結果では、「声原」では、見系字と精組字の発音は截然と区分されていて尖団の区別は保たれており、また、影・喻・疑母などの音節の分合状況は、「喻母開口字・疑母開口細音字・影開口細音字」の声母が合併、「喻母・影母の合口字と疑母合口字」の声母が合併、「影母の開口洪音字と疑母の開口洪音字」の声母が合併しているという状況であるという。

ただし方以智の母方言がそのまま方中履の言語状況を示すものであるとも予断できないが、羅熾『方以智評傳』や余時英「方中履及其「古今釋疑」——跋影印本所謂「黃宗義授書隨筆」」に述べられている方中履の生平によると、方中履は明の崇禎11年(1638年)、父の方以智が28歳の時、その第3子として生まれ、清の康熙25年(1686年)に

49歳で歿した。方中履が生まれたのは、方家が桐城の不穏な状況を避けて南京に寓居している時期にあたると思われるが、その前後の数年間、父の以智はその父の転任や投獄などで多事多端であり、武昌や京師などを東奔西走している。そして中履が数えて7歳になった崇禎17年（1646年）は即ち清の順治元年にあたるのだから、中履はまさに国勢が危急にひんした時代に幼児期を過ごしたといえよう。その後、中履は1646年から1671年までの20年余を、母や父に従って福建や広東の各地を転々と避難して暮らし、1663年から1672年は多く青原（江西省廬陵県の東南にあり、唐代の高僧が多く隠れ住んだといわれる青原山のことか）に住んだ。1672年に棺を護って桐城に帰り、1686年に逝去するまで、（桐城の）稲花齋に隠居したという。「古今釈疑」の著は、中履が「弱冠」の頃より集め始めた労作に基づくというが、その「自序」の日付は康熙18年（1679年）となっており、『古今釈疑』全体は、中履晩年の康熙21年（1682年）に汗青閣から刊行された。従って、中履は南京も南方の諸地方も知っており、さらに、著述を整理・刊行し始めた晩年には一家の故郷である桐城に隠棲していたわけで、桐城の方言にも十分親しんでいたと考えてさしつかえないだろう。方中履の標準音に対する観念と方言音の認識については、今後、続くの各節をも読み解きながら、さらに考えて行きたいと思う。

参考文献

- 譚世宝『悉曇學與漢字音學新論』 2009 中華書局
- 趙蔭棠「康熙字典字母切韻要法考證」『國立中央研究院歷史語言研究所集刊』第3本
第1分 1931
- 『同文韻統』 1978 新文豐出版社
- 清・熊士伯『等切元声』『四庫全書存目叢書』「經部」第219冊 pp.1～172
- 清・熊士伯『等切元声』『統修四庫全書』第258冊「經部・小学類」pp.201～372
- 『統通志』萬有文庫第二集「十通」第五種 商務印書館
- 田久保周譽『批判悉曇学』 1944・1978 真言宗豊山派宗務所
- 馬淵和夫『日本韻学史の研究Ⅰ』 1962 日本學術振興會
- 馬淵和夫『悉曇章の研究』 2006 勉誠出版
- 慶谷壽信「『字母』という名称をめぐって」『日本中国学会報 第33集』 1981
- 永島榮一郎「近世支那語特に北方語系統に於ける音韻史研究資料について（続）」『言語研究』九号 1941
- 呉元満『六書總要』（附「諧聲指南」）東京大学東洋文化研究所蔵本

富平美波「『六書總要』(明・呉元満著)の音注について」『アジアの歴史と文化』第2輯 1995

『安徽省志 方言志』 1997 方志出版社

平田昌司主編『徽州方言研究』(「中国語学研究 開篇 単刊 No.9」) 1998 好文出版

時建国「『切韻声源』术语通释」『古汉语研究』1996年第1期(総第30期)

時建国「『切韻聲源』研究」『音韻論叢』pp.444~479 中国音韻学研究会・石家莊師範専科学校編 2004 齊魯書社

孫宜志「方以智《切韻声原》与桐城方音」『中国语文』2005年第1期 総第304期 pp.65~74

李世沢「切韻射標」『説郛三種』(上海古籍出版社)所収

沈括著 胡道静校証『夢溪筆談校証』 1987 上海古籍出版社

余時英「方中履及其「古今釋疑」——跋影印本所謂「黄宗羲授書隨筆」」(國立中央圖書館藏本)古今釋疑』(「雜著秘笈叢刊」11)卷首所収 1971 台湾学生書局

羅熾『方以智評傳』(「中国思想家評傳叢書」) 2001 南京大学出版社

『中國古今地名大辭典』1931 1982 台湾商務印書館

【本稿は、科学研究費補助金(基盤研究(C))「『切字積疑』訳注」(20520388)の助成を受けた研究成果の一部である。】